

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color
Black

White

Magenta

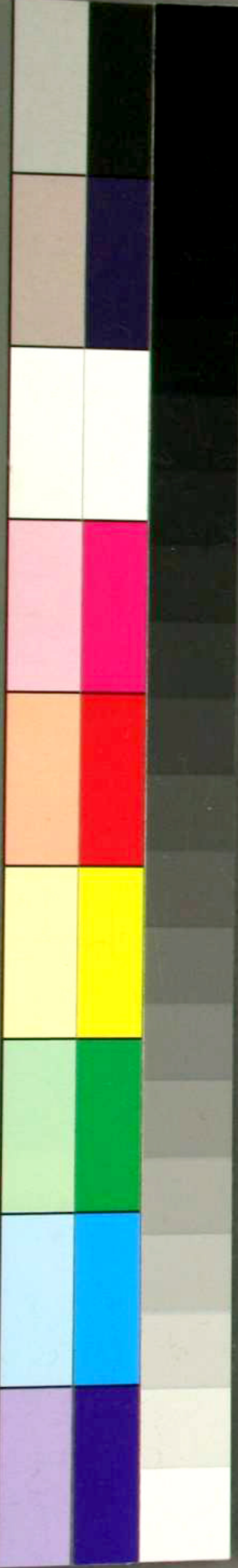
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

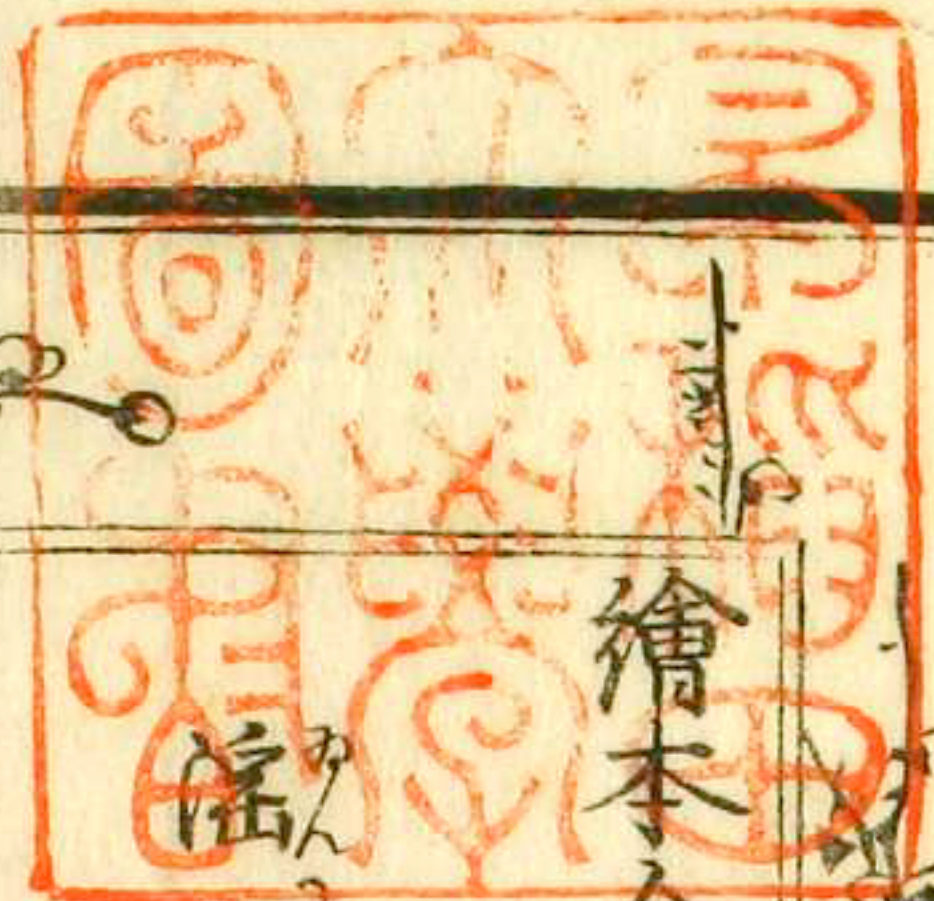


繪本合邦辻
七

行
遠 13
PM 2
7



明へ速
號 872
卷 7



繪本合邦過卷之七

剛 祿

淫 祠靈異とあんの伝

吾異神人母死する事

簡兒山中に宿して邪神と感ずる事

販稍客處に少女賣る事

少女贖に備ふる事

村人簡兒を従く邪魅を殺す事

簡兒邪靈を斬りて少女を助ふる事

明治三十年
十一月十日
購求

繪本合邦過卷之七

村民簡見取書

村民洞口を著しく古程取教と書

肥列の處士回代が來歴の活

回代私邸の舊儀を無事活

富田幸治郎具代女小立幕の書

十

繪本合邦過卷之七

瀛洞靈異狀るにの活

夫妖人に由りて其も位に強きるに於て是を信する事原々其
 神業其に素く其性を生じ其例が如く此村の側なる村民等
 鯉の窟に罹りて神を求むると思ひ遣小祠と建て是を祭り又種々の
 祈願を爲るに精験ありと云はれり一年とも種々の内又次第に境
 内城後先修理と加へてを以り祝史を連來り一村より挨拶して神と
 りしに内の子祀と情らひ致ひ素く奉養の神に是より其其は遂に
 を以て廣くまて是城好む人の心を以て五智の野人等を遣りたり
 と祈れと爲るもの勝て致さく今まど人の掃りりし山海を以て
 禮還るかに治むるを以て二年毎りと清く享徳二年のまに



如く村氏の小児熱病を更く好まず毎朝うらじふ村氏も大に驚
 と其足は迷ふにあらば山の神とあつて平念を祈るに志すと候
 一々合々神を以てまじりて祈る中其神を山中の小祠に如く移すの儀
 を執り神湯とつげ祝詞を捧ぐ舟渡り後其の祭式を初む村氏も
 恐く奉請し大に祈りて神を俵に載せしむるに祭式に又千人と
 祈りて神を遠に往く如くむらさきの村氏と祝詞を捧ぐ人馬は
 社を考致さるる基深淵よりぬに神身として一村の神託を述べし
 小和に今日如く祭とほしく新築とせしむる其財を寄附し今日より
 五月にあらん親妹婦一人と社に備へけ秋と始として旧習を
 更し永く一村の守護神とめく秋祭の儀の猶更しむるに
 八月と経ざる内そく神領とひびきとせしむるに又例儀と文に
 村氏も其書物とて之を畏身の毛俵とせんまはるるに
 一に神領の中にも神をうつりぬ付依りて神を以て俵に
 て女抱せしむる方及んで此の神身有り次第と同く其の
 くよて其事も是れといふ是れは村氏も蓋し其の書物に
 若し神領に宿る一村の命を以て目あらしむるに是れ又
 理に似せんと候として神を寄附し先推が女にう定めんと
 とよと名を祝ひしむるに其の儀にさしむるに目あらしむる
 儀に似せんと候との一人もうけしむるに村長小首と
 候と備へし神を寄附しむるに村の女を頼りしむるに
 とも是れは本まじりて其の角評儀とせんより一村より
 とう更なるべしといふに其の儀に似せしむるに

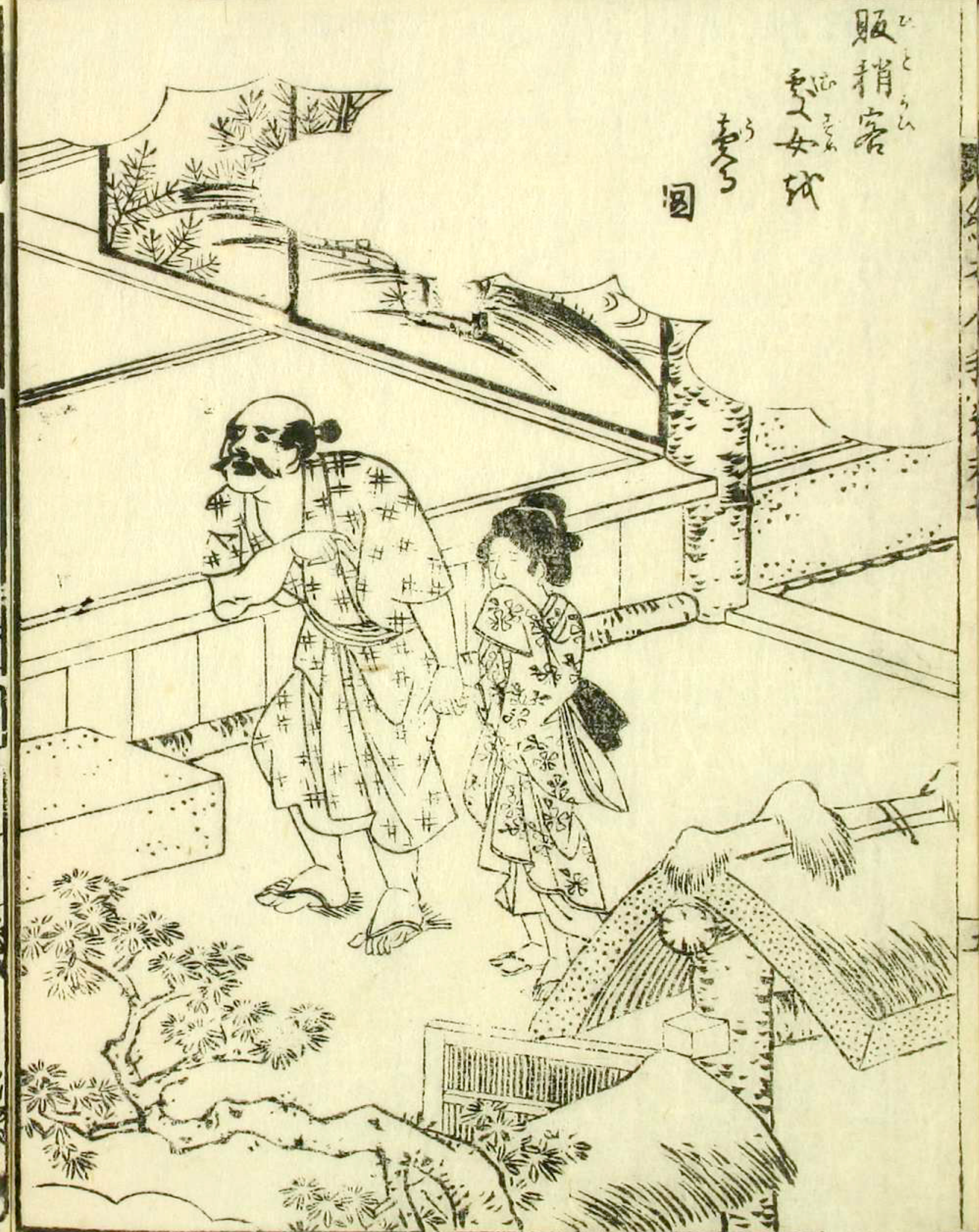
候と備へし神を寄附しむるに村の女を頼りしむるに
 とも是れは本まじりて其の角評儀とせんより一村より
 とう更なるべしといふに其の儀に似せしむるに

誰も子と賣人といふものもなくを角して其日限にも及び六村人必何
せんと思ふと痛多に其日補討及んで二人の長女とほひ外く賣人と
つものありし六村人等入に收ひ捨捨て賣人より更らう候に体は更夜未
の夜宿と相人其夜初更ころにけり付はく山中の小祠よを宿を

簡鬼山中に宿して夜林と試す活

初より其指骨見候も令体と出てより日圓及び辺江のふくと思はる
若狭丹治と候く指骨は出づと思ひ定け日行本より若狭海へか
るると不圓けの中はく日と暮るるもけいよて二夜と出れ下と根指掩
りてぬ露と漬る地と探及の内は貯貯る得紙櫛号と取出し湿ひ
を没て体はひるるる入来入志と腹身もさる人おに有る敷と體安眠事
及し波く山野に在るは茨城悪秋の三夜と更がぬに只瞑目都たしく

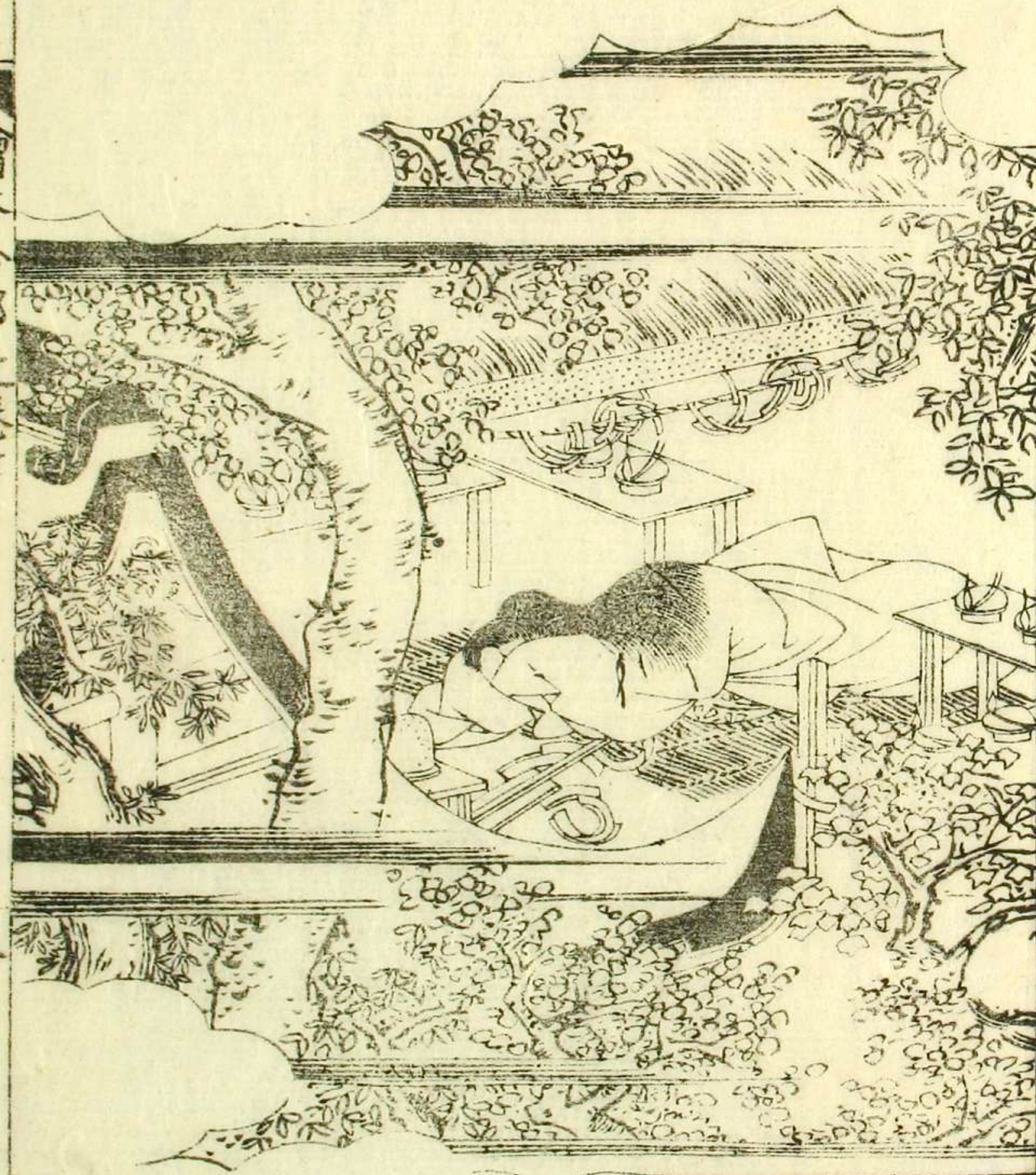
氣血の芳と候るのみにて考て眠事さるるもあはれ多るるも促て山嵐
樹木の枝葉を初一移り候と同一と暮るるが腕骨蕭然と考るれりも
遙人の病勢回下と不更事と考て地に其勢差切なきけ山中遠賊
位くゆ人と悩むる強た今更更人の性もあはははははははははははは
ふしてか心と疑はせ其慮に糸と懸うさんと考るる候にもあはれ痛し何い足
んと紙櫛と出く其勢ある考と考り画に火之ありあはれ不番之ひ其方
と同番としくわらうらるる山間の平地うる取にの林ありては起及び火の光
真内より左の樹よりより痛ひくは林の中より小社ありて教多の焼ぬ
を悲し相教と見ふに其形十はふ家のかや白夜と考るる候に候に候に
然啼く居々と候骨見候見えに野狐の教ありあはれ又遠賊の取はははは
社に大に怪其子細と回人と静く林中に進入きく被女骨見が頼と考るる



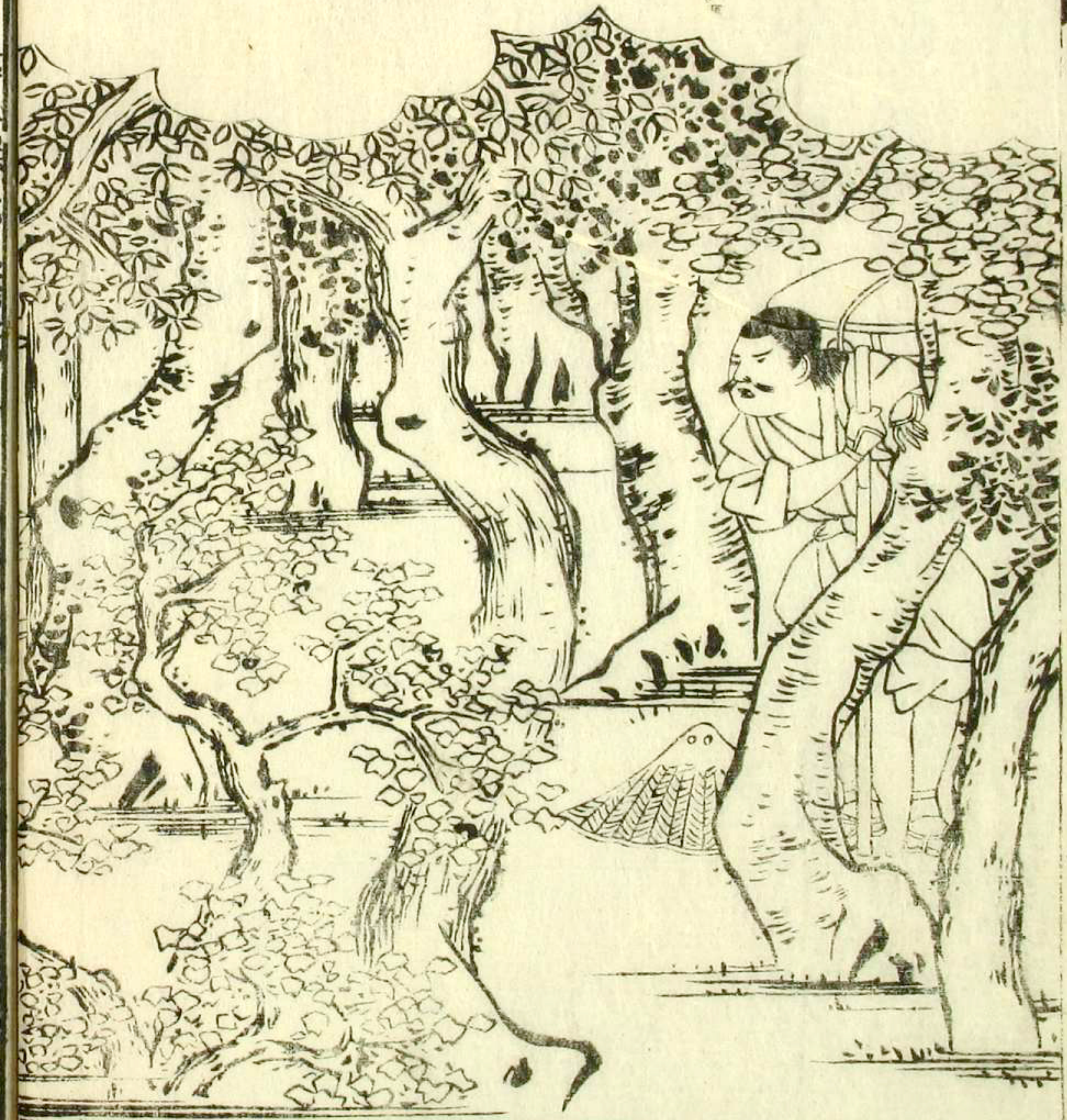
販稍客
女成
喜
圖

已喝と叫んでゐるといふことと巻簡く走れば大に岡君の形骸なりし
 久勢見舞とを忍ぶ事うろろ我の周囲の修治共今う今兼偶け山中に
 宿し呼聲を聞いて其初聲を伺ひ附直にうろろ危殆と驚く人の身を
 うろろと云ふまじわ女が一本塔へく稍泣きを止るまゝうろろ體を例
 にさう原兼は只獨影にまじ呼子細と同が女海へ個人を我の由國
 皆掛のめうろろと想用事ありてめりて二人の男理不をいふと流ひけ
 取の獲又ま渡んといふは使徒ども能に計に任せくまは後まじわ秋入
 て神社より村人のゆるとゆくと病ま家に送りゆに下をうろろおに野若
 せんといふ其事の怖く且ま後で後病ま家に送りゆんといふと情
 に其斗はせしに村人等おには活をせ加初害とらして山社へ佛(種)の糸
 我とらして後家とゆきまゆり家彼男の身り殺とゆども使うくおん

とまじわことどもは是を信じてまじわ初事終る迄に命と失ふると夜て
 思ひ啼泣し之頼く我と殺めんと怒に請求し久勢見舞又驚くまじわ其
 情し儘を借清思ふとまじわが女に對ひまじわ今おれを殺ん事具邊
 情ども思ふまじわ高社一村の若れして如初獲をまじわの村へあじ必定
 初獲のれうろろは流祠あるまじわ又不仁の涙とじて人の命と失うる若
 今おれを殺らうともい流祠有限の命に記さるの流は二人の罪を
 殺し人お思ひうろろ流うろろ人命とやお不圖も流にまじわ社なる
 まじわ社の林にゆると伺ひて其根と流意味する野人の表と暗し水ゆが
 如くまじわうろろまじわ人といふ之我初てあるといふかもし怖くおろろ社の若れと
 初まじわも側まじわまじわ実存と人存まじわまじわまじわか女おまじわとまじわ
 下は若れが男まじわ流法とまじわ初うまじわまじわ色うろろ思如く流うろろ散



かろ
が女
頼に
依ら
る
図



村より村へをたどりてあはれにむすむすの祭りにあはせよ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

村人の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

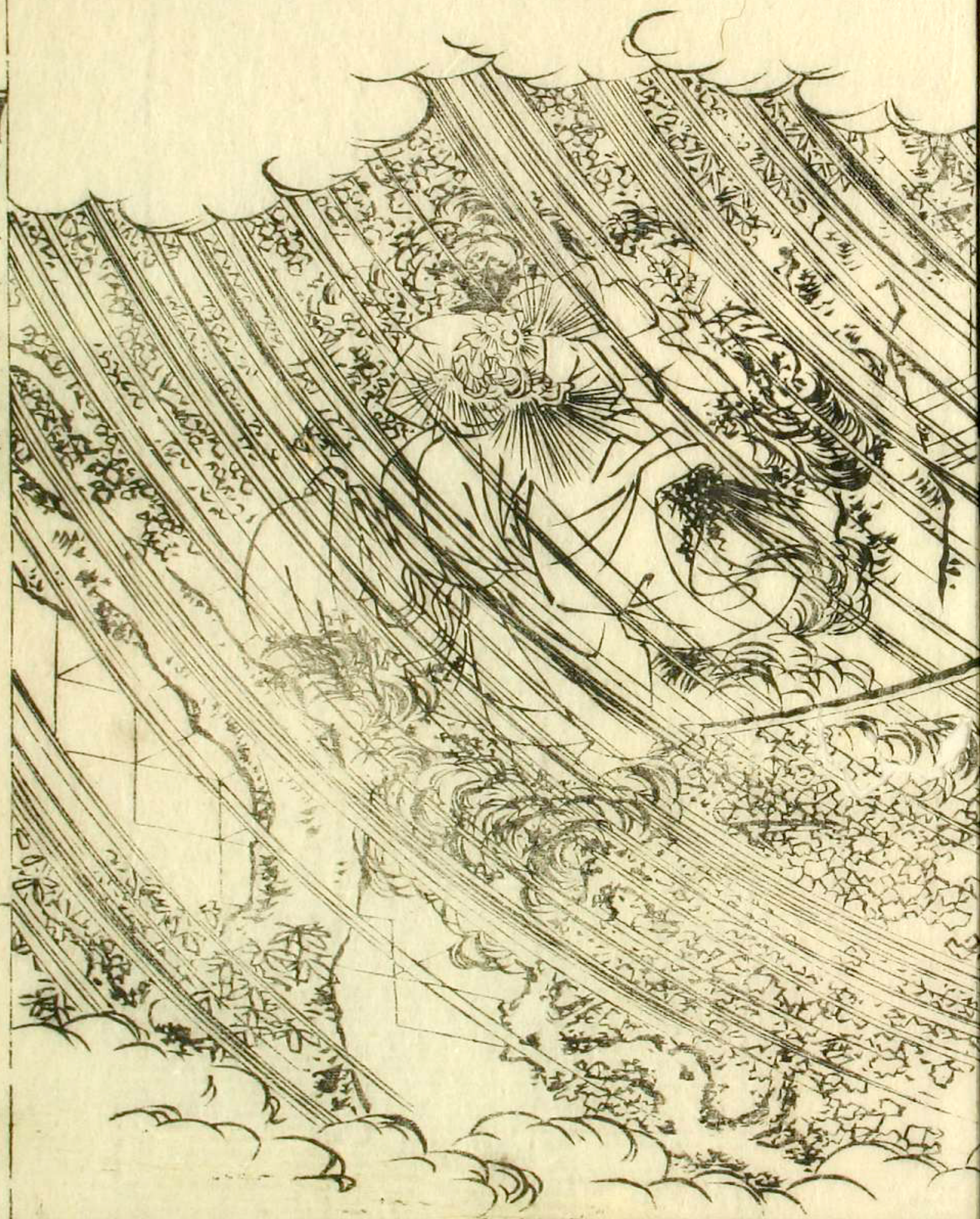
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ
此の祭りにあはせよとて、村の長老より村の若衆へ告ぐ

出づる中ふり出づる人一村の命に易難一人もお救へず神魚と宿め
 んとて神社あま中にもおに夜業は出んと御淋と持てるあ捨人斗かに
 進ぐ余杖もろく好くまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 ても事あり物取示とぞうじと制しきまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 るゆらふ早まじと号りたまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 そ奉さるる人の命と取らまの神といふべし下木林とふれり理と知
 げ高に畏中ふりよとくね難處にきて奇怖とらはりり是こそ是ト木
 が中ふり神のまらるるもと切らるるもと人の中へ投せ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 なるの鯉の身なるに秋の身あらんやは全く秋の末ふらりと好くは
 依は給見と致して神取の上たは清下南流身を流れ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 の神使とな多く人と失えとせし不圖も御座はて其真と失えしは

謝しきまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 下を扑えして神使を長き思に流し給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 解らば給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 てはるとせし小祠の後は又おとん失うらゆらんとたは血を養ふ
 完果と披し給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 いとほむ村内其好い給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 の山奥より洞ありて其血をいそるりたまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 洞は狭して入難きまはせ給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま
 葉をあく洞に積たてそと焼く一か所に煙の内に入といくく内より
 養出するものあつと毎人の御淋と持てるあ捨人斗かに
 狸石のあはれを切してらうらうらとて又疑をばは給見止りゆれば杖あらはくあらひろふま



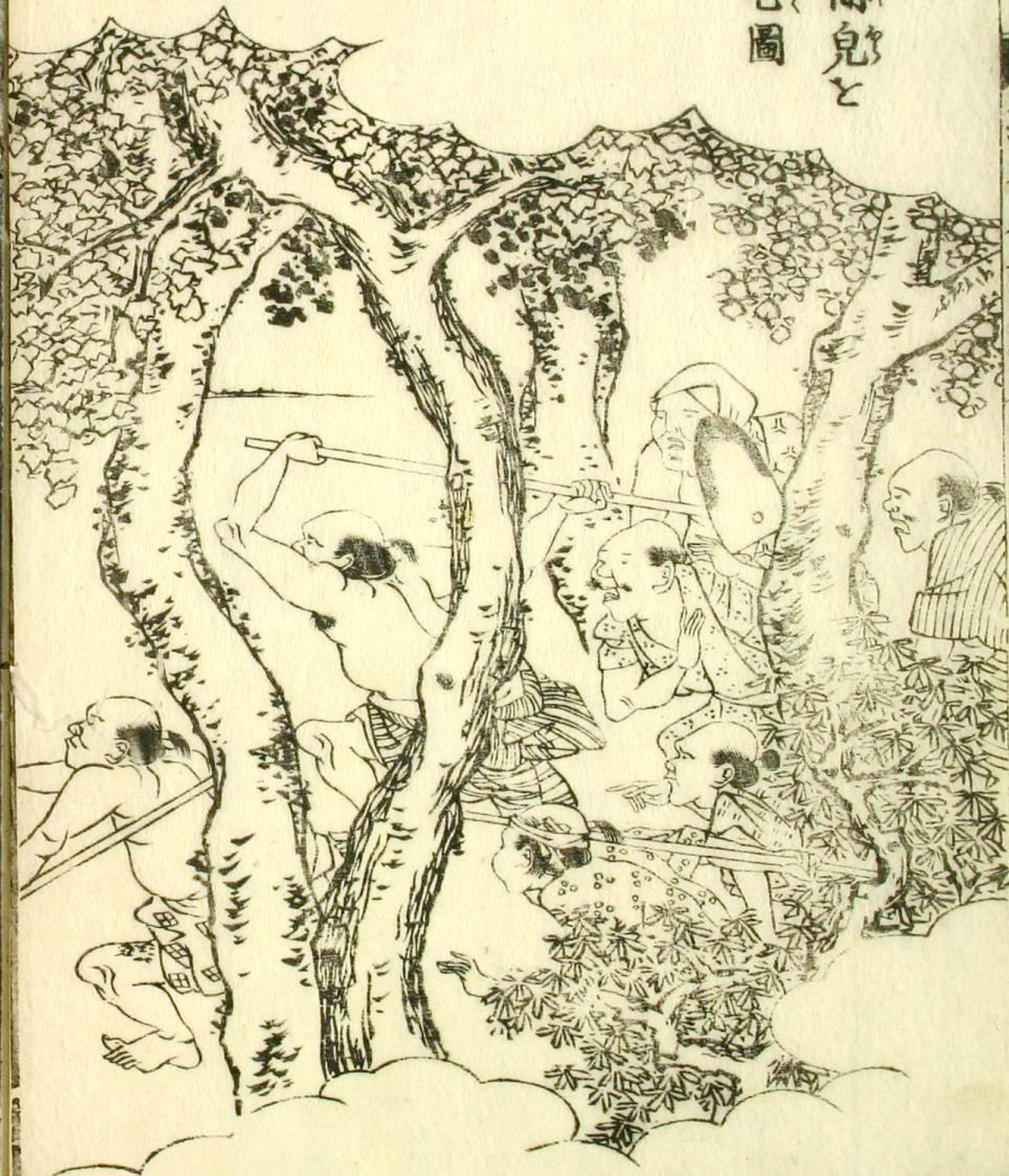
偷兒
少女を
助る國

に依り村々付いて厚く養育し今頃勝て終射し賜く村に還るる
 事を知りて皆其恩を謝し我々亦法國所領の如く是の如
 くとすく賜ふのことは且つて人家の法と更く通じ金銭の用をも
 只預ふ人の患難を救ふ後世の利益と求るにあり若し其恩に
 ありてはともく其恩のにおい求めらるしむら女も身價と村の
 我々亦バ千里を掛しとて油く女及び父母の哀と解脱しと情
 一系に及び後世のり止るる人の故が女け方ありて用は其
 さらまをもはし我村より送る油く女と解くをばとて皆掛
 免も解くは油と潤て村々別を若再び若使法へも移るる
 氏守山中の小祠をそ救るる心あり慢るる又油く女に
 小氏其價を携来るるのよと若く死と謝するにやとて其
 懼し中縁と知り蓋小祠を祭るなりとては油く女と解く
 免も智勇に遇ぐん永一村の言と賜ふるものとて今悔
 肥前守御書 肥前守御書 肥前守御書

更七情への生と俱に生じて難免るるものなり是を制して其
 是の只若あるる若魚はし是を制すると知るは其向而
 後又魚に流く亦若若うたが如く油く女たる人遠に情
 の道を行くは是の佛氏之流若因果報の流るる其
 人理とをさる魚と維初若魚の流るるは其全益
 於後園を撤取中鳩村に田代法を傳つといふ事あり若し
 母とたよ信りしむ母佛教と信する事其厚くた日深の
 又はた思ひ知るる村より後世報恩の思ひたる事あり



杖
民
簡
息
と
取
卷
圖



とすの兩國主のを臣水岡集辰の方へ遣はせしめその言を以て其の
力とあして其の由をわが平陽國の中と告知せしめてを渡すと其の
是と面会しそのを臣水岡集辰人といふ高祿の又あるは家法の氣
密なるるの小決度に従ひて其の機又通路とてさやうく又又また其の
後其の事うつまは頼と通せんやうもよく其の物とて告めけるが忠告思ひ
出し別より今又其の初詳細とて其に渡渡方へ出入めとせしむ
に通し使ぬれとも侍候す

田代私娣の爲情と怒る話

斯に藤田養拙の娘は代女は味を求むが長崎へりし後只管ゆと侍居た
るに不圖も又の斗して水岡がなまよふ心は好むとも又の命をれば
是れなく且地(處)うるとい事其ははたうとの契約と違ふに時前より

れあはれと其の末とあきて又切又初し種又主人の心にも叶ひ決然軍に働
まはせりやがえ其客儀今又職へ侍客の若侍に居よとてそのあから
らげとへども内かの痛最うり多し其心を取めぬるしは側位にて圍
房も之入る苗田幸次郎といふ壯士は又思ひと涙し絶書とてそのあから
まはも考とたりとてそのあはれとて其言を以て恨めしむるは代女
は在東のと受給物あまは絶し河とも出づ難面遇し後又幸次郎又恨
めしむるは其の心とてそのあはれとて其言を以て恨めしむるは代女
もそのあはれとて其の心とて其言を以て恨めしむるは代女
ひ居るに一日宿入の町人素出たり其に涙及び細ありとて其の宿の
事やんと人其を泣ひ子細あはれと問はぬ其をひそめ失れ相識るの
當市彼に而奉てはる代女一痛は書状とて其は是よと其の宿に



左程と
殺八圖

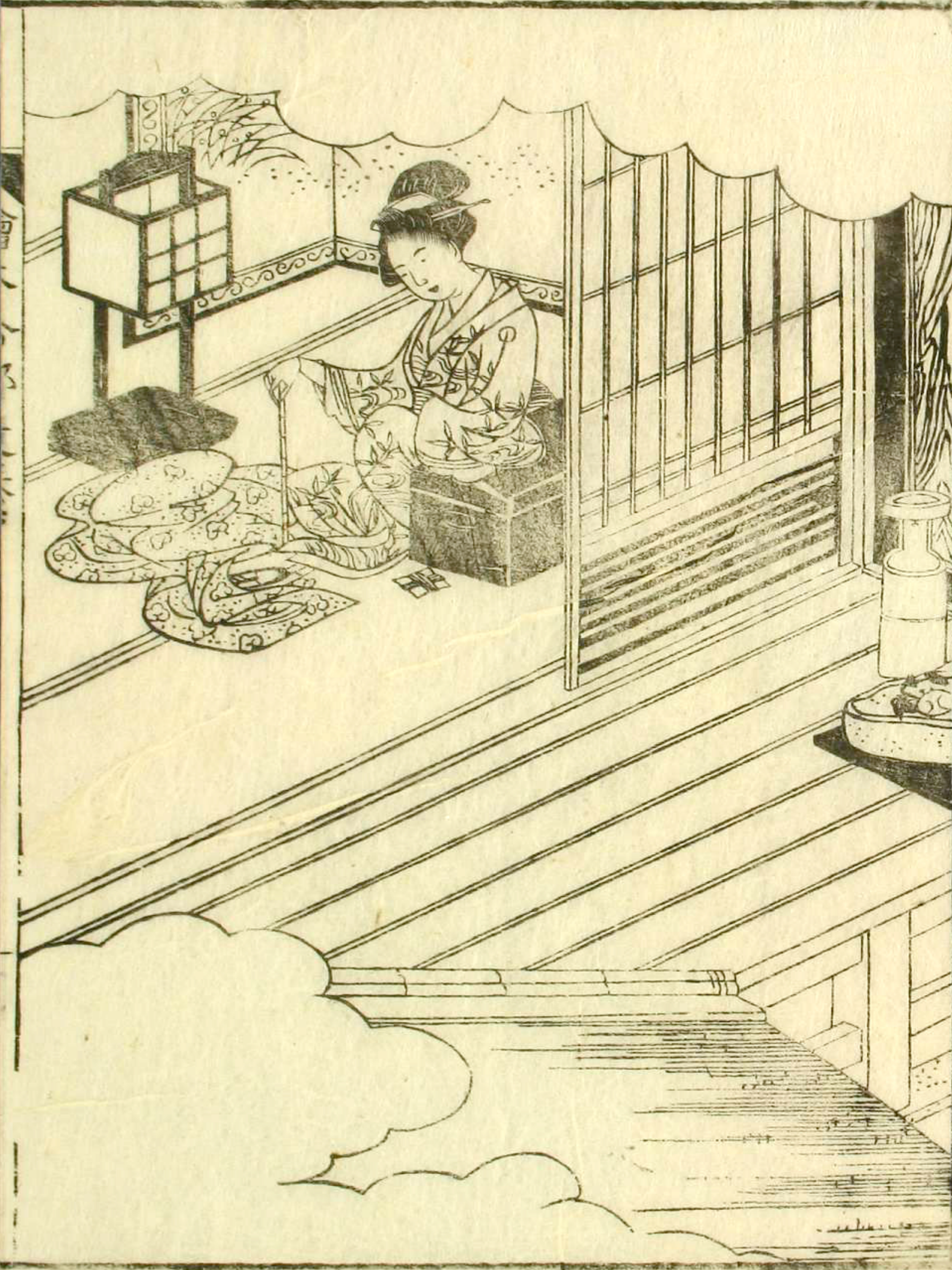
大
村氏洞
口
成
薰く

新編 新編

五

御許御入る房も所立入るこそ近江屋入るはよも痛みの建
下さるし御許なるに何れも預りよと云はる方より尼の書状もいづく
てよりいまは悔ふが御前より下さる一と信しく頼み是の留田易律と
こと清く其書状と腹中し国房へ出さる物に達しやんと思ひし其日ハ
事禁に給くお忘れ敷よ今も体く及今もその書一紙出でり金女乃
名もこといむはし一く男子も是にゆくと思通一尼代女がなむ書と
送り親里へ社託屋きに依人と頼まれわけよ尼代女の侍も云番きし書
もやう違ふ私通のめより紙るにあはれや中欄封を被くつ今も素の書
ははる書の道のおと交換し長湯へりしより山は四圍くをさ入人と
情の切なるに何れもましく細よ思わしよ云番なる心慟りああらぬ
札にわげ御前も人も中にいし書承りて今も良縁の縁をいふ
ん何事か書と申して二人の交情と信しと再之標一とくよ尼代女と素

ト出なる書中に見代女より贈る書一ちり刀あるは刀下りるは尼代女
依りて彼刀をけ方取交情と信しはのたと信しく刀代女に建せり尼代女
何れもましく書と申すく自因縁と云はに從て一尼に坊なる良縁にあは
ると信得矣と念願と年と云く尼代女が尼代に頼むは云よと云
主人永固友のなは極むく身とく尼代女に云とせり其方に返答せり書
今後の思ひも出れば後永く交情と信は先にけ方より贈しお早く此
のまゝにたわすはけ方と申しおも危やれ又主人の冠と云う身も後
のまゝと憚自筆にけらると有は為情の詞を細くと書綴堅く封をして
と信承に三日と云く書と申す未だ来りし書尼代女が危りるると彼御書状
にけし仕成しうと信じては書法を束のより刀と送り紙とを被りけ



西田 幸次郎
見代女に
恋慕の
因

繪本合巻 近巻七

七

已^つ引^くく^ま糸^通田^が波^せし書^状と持^油觸^はた^らしに波^したれ^はは^をつ
 如^く初^は津^津津^津あ^んとい^は愛^にも知^れば^家か^うぞ^う捨^もま^まは^はと^保じ^し
 色^の心^悟深^く奉^月隔^りし厚^意中^の是^るも^い百^もも^進と^然分
 に^いひ^もよ^うは^子方^の無^情と書^並利^自第^もら^はと^あま^はに^果て^る
 遠^方の^と操^たし^し金^文に^始ま^るま^るの^思不^まは^心好^しる^を
 情^女め^終も^奉月^家と^欺き^し新^女衆^あは^はと^齋と^送新^と送^新
 鬼^畜未^だの^心とい^は知^るは^他困^又ま^まも^教書^に忘^れ早^くゆ^てま^ま
 と^あま^まい^し心^ある^まは^くは^情奉^月欺^きし^恨は^はま^ま
 ち^うは^は梁^假令^永固^友の^保国^に秘^をま^まも^思ひ^入く^お教^けは^持持^持
 懐^をま^まと^和人^の如^くめ^く種^くは^と通^とま^まま^ま
 繪^本合^邦辻^巻七^畢

